

困った時はお互い様 —アジアのNGO

菅波 茂



イラストレーション：栗岡奈美恵

【国】 連難民高等弁務官事務所本部で開催されたNGO会議で、欧米の国際NGOが理解できる「アジアのNGOの特徴」についてスピーチをした。何故にアジアのNGOは人を助けるのか。「フレンドシップ」のためと説明した。友とは幸せも不幸せも共にする。友が不幸せになった時にこれを助けるのは当然である。「フレンドシップ」無くして支援活動は始まりにくい。支援活動が始まると、苦勞を共にする人間関係である「パートナーシップ」になる。「フレンドシップ」が「パートナーシップ」に変化することを「相互扶助」という。「パートナーシップとは困難を共にする尊敬と信頼の人間関係」と定義した。尊敬と信頼の人間関係は民族、宗教そして文化の壁を超えることができる。私はこうしたアジア生活共同体の理論のもとに、国際ネットワーク（AMDAインターナショナル）を

組織すべくアジア、さらにはアフリカ、中南米へと人的ネットワークを拡充してきた。その活動の基本はローカルイニシアチブ、つまり地元に通じた支部を中心に活動を進める現地主導型としてきた。

二〇〇四年二月二十六日。二〇〇〇年に一度と言われる規模の大災害がインド洋沿岸の国々を襲った。災害発生当初より国際社会の救援活動に先駆けて、AMDAインターナショナルのうち九支部と岡山本部がAMDA多国籍医師団を編成して、インドネシア、インド、スリランカにおいて大規模広範囲緊急救援活動を開始した。被災国に一〇〇名近い医療スタッフ（他に現地医学生約二〇〇名が参加）を送りこんで、巡回診療や保健衛生教育、子ども達への予防接種、破損した病院の再構築等を実施している。インドネシア、インド、スリランカ各支部が多大

なイニシアチブを発揮してくれたことは言うまでもない。こうした理想的な緊急救援活動を可能にしたのは、AMDAインターナショナルメンバー相互の信頼関係である。その精神は「困った時はお互い様」という「相互扶助」であった。まさにアジアのNGOの真骨頂が示されたと自負している。

二〇世紀の戦争に代わり、二一世紀は災害により多くの尊い人達が命を失う可能性がある。「救える命があればどこへでも行く」というAMDAのスローガンを確実に実現するために、相互扶助にもとづく「フレンドシップ」の国際ネットワークの拡充に、今後も一層の努力をしたい。